

直営が生み出す手触りの建築

海野健三



1階事務所 右手の階段を上ると上階は住まいとなっている 階段はベニヤを箱状に組み込んだものにカシュー塗り

■WING HUT

所在地 東京都江戸川区
 家族構成 夫婦+子供2人
 設計 海野健三/海建築家工房
 施工 海野健三+友人たち

構造規模
 地上2階 木造
 敷地面積 38.4㎡
 建築面積 35.8㎡
 延床面積 81.13㎡
 竣工 1986年
 仕上げ

屋根/カラーステンレス平葺き
 外壁/ALC 50mm
 居間・食堂
 床/カーペット
 壁/ALCの裏にシックい 一部ラーチ合板
 天井/ラーチ合板

撮影/本誌写真部



屋根裏に設けられたサンルーム 押し出し窓はオリジナルで50kg以上の重さがある ベンチの下はガラス張りです階の居間へ光を落としている



階段見下ろし 玄関の扉には曲線が用いられ人型をしている

新しく何かを開発しようと思うとき

自分の考えをすぐに実行できるのが直営の強みです
 —この家は建てて6年になります。1階を事務所、その上を住居として計画しました。敷地は11坪しかありませんが、狭苦しくなるのはいやですから、狭いところでのさまざまな工夫をしています。そのひとつが階段。スペースを節約するために回り階段にして、でも普通につくったら出っ張ってしまいますから右と左を互い違いに上らせたり、テレビ置きや収納棚を兼ねたり、また裏から見てもカッコイイようにいろいろな工夫をしています。構造は普通のベニヤを箱状に組み込んだだけのもので、下地らしい下地はありません。段板は厚さ21mm、側板は12mmのものをを使い、仕上げはカシュー塗りです。形は現場でベニヤがどのくらいまで曲がるのか探りながら決め、段板の形に切ったベニヤを床に置いて、実際に歩いて確かめながら組み立てていきました。
 —施工はほとんど自分の手で行いました。新しく何かを開発しようと思うとき、たとえばこの家でいえば窓とか、さまざまな部

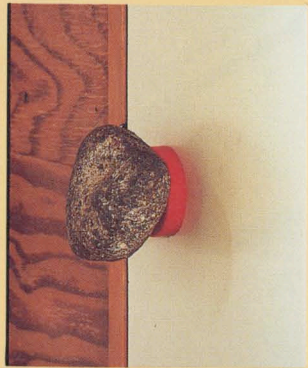
位で規格にないものをすぐつくれるというのは直営の強みですね。やってダメならすぐやり直しができる。かなり協力的な工務店があってそこに全部まかせられるような場合でも、担当者を説得し、さらにその人が実際に作る人に説明するという2段階構えでは、僕の考えていることがなかなか伝わりにくい。そこにはお金の話も絡む。ちょっと難しい試作品になると案外一品が高いものになってしまう。しかしそういうルートでなく1枚の窓にしても、鉄骨屋さんに僕が図面を持って行ってああだこうだいいながら実際にそこでつくる。するとすごく安く自分のアイデアが実現できる。それが自分で施工までやっていることの楽しさとか強さとか。時間はかかりますが、つくるといことはその辺までのことだと思えます。図面はひとつの段階であり、最後までがつくる行為であって、僕にとってみれば後半の実際につくることのほうが中身が濃くて何かやっているという気がしますね。
 —実際に決めていくのは現場で自分の手で触りながらです。たとえば1階の3方をぐるっと回っているハイサイドライトは、強



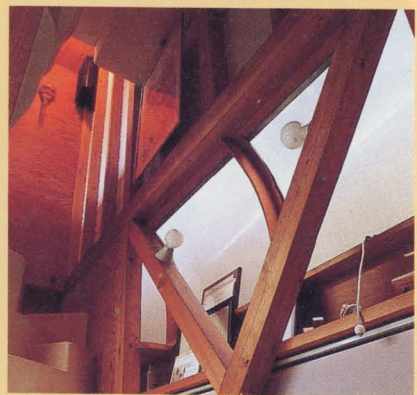
2階居間・食堂 スペースを有効に使うための回り階段は収納棚も兼ねる 左手の椅子は石を使った海野製バランスチェア



玄関のゴムホース製のドアノブ 木の枝は子ども用



石を使ったトイレのドアノブ



ポリカーボネートの弾力性を利用した1階の窓

制換気がどうしてもいやだったものですから、開くようにしたい。どういふふうにするか、図面を書いているうちはわからなかった。だいぶ施工が進んできた段階でポリカーボネイトを曲げて、その曲げに對抗する力で開ければいいということがわかってきた。ポリカーボネイトはアクリルや塩ビと違って弾力性があるから、だからしばらく仮囲いのままでしたね。そういう感じで、まず全体の骨格を決め、部分部分を現場でつめていくのが僕のやり方です。逆に頭の中だけで考えていると、限界があるんですね。実際に素材を曲げたりいじくりまわしながら、僕だったらこういう使い方ができるという発見があり、そこから新しい形が生まれるということがありますね。

— 3階部分は小屋裏を利用して寝室と浴室。その真ん中にサンルームがあります。押出し窓はこの家のために設計したオリジナルです。サッシュの荷重は50kg以上ありますが、レールにのっかいて、そのレールは水平ですからある程度重くても案外スムーズに開け閉めできるんですね。このアイデアがなかなか出なくて、

ここもしばらくベニヤをかぶせてほっておいたんです。サッシュは屋根に沿って斜めに入れ、光が窓からベンチの下のガラスを通して下階の居間に落ちるようになっています。風通しの効果もあり、これも狭い敷地のもうひとつの工夫です。

自分がどういふ人間になりたいかということがどういふ建築をつくりたいかにつながる

— コスト面でもすべてローコストの極みを追求しているという感じがありますね。材料はすべて下地材なんです。自分の家で実験してみてもそれほど悪くないので、人の家でも使っていますが、天井板や壁板には構造用合板を使うことが多いですね。表面は天然のカッシュを少し塗っています。なるべく、ついた傷がひとつひとつ家の歴史となって味わいが出てくるような材料を使いたいと思っています。そういう視点で選んでいくと下地材がいちばんいい。生活するのは、住宅にとってみれば暴力を内在するようなもので、それを受けとめられる、ネジをとめてもまったく気になら

ないし、むしろいい思い出になっていき、決して材料を傷めたということにはならない、そういう材料で包んでやると、生活は神経質にならなくて伸びやかにやっているとすうんです。

— どんなものでも受け止められるという材料がある一方で、とても繊細な材料もあります。生活を包むにはあまりふさわしくありませんが、ものを大事にしないといけないという心を育てるもの、子どもにもものをいたわる気持ちを教えるもので、それは非常に日本的な材料、たとえば和室の土壁とか、塗り壁などがいい例です。こうした材料は用途に応じてきちんと使い分けされる必要があると思います。

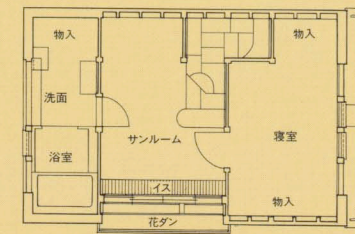
— 居間の壁は仕上げをしていません。断熱材を入れずに外壁だけです。断熱性を考えてALC板の50mmを使っていますが、効果はいまひとつ。しかし壁厚の有効性のほうがはるかに便利です。壁の深みが棚などに利用できる。テーブルは現場で建具をつくるのに失敗した材料を持ってきて、子どもの成長に合わせていろいろなものを付けてきました。

— 小物に石やホースや排水管を使ったりしていますが、これはそもそも工業化からなるべく遠くへ行きたいというのが出発点です。もっともらしい顔をしている規格品のウソということがあるわけで、工業化もいいんですが、そうしなくてもいいのではないかといいものも結構ある。私たちは住宅の商品化、工業化に慣れてしまっていて、もっと他に楽しいものがあるのに見えなくなってしまう感じがします。人間から遊離した建築、空間をわざとゆがめた建築や人に媚びようとしているもの、それらは人に媚びながら人間が近づくと逆に拒絶してしまう。底が知れると飽きてしまう。そういうものが実に多い。しかし人間の生活をもっと抱擁するものが大事で、工業化に騙されるのではなく自分のスタンスをきちんと持つべきだと思います。

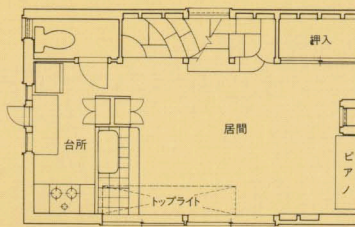
— 一時石に結構凝ったことがあります。トイレの把手は石ですが、石というだけでちょっと面白い感じがします。その素材に出会って、石を見つめてこれで何が出来るか。このホースもぐにやぐにやしているけど芯を詰めればドアノブに使えそうとか、毎日何かの素材を見ながらそういうふうを考えるわけですね。

— 僕は海が好きで、それが高じてヨットを自分たちでつくったこともあります。その時にいろいろな工具を使うんですが、工具を知っていると形が生まれてくる。ちょっと変わった形でも案外簡単につくることができるし、大工さんにも説明しやすい。つくるために無理はしないし、形に説得力が出てくると思います。形には用途なり意味がないとつくることができません。ものをつくること、つまり無から有をつくり出すことは生命力があるからできる。ものをつくる気持ちは生命に正面から向き合えないといけません。それがものをつくる姿勢だと思う。斜に構えたような建築、形に用途も意味もなにもない建築は生きることにに対して素直ではないですね。そういうものを否定するわけではありません。

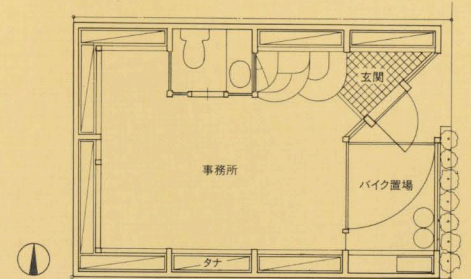
— 建築のテーマは“自分”です。自分の生き方が建築になっている。自分がどういふ人間になりたいかということが、どういふ建築をつくりたいかになる。だから最終的に自分はどういふ生き方をしたいかというのが建築のテーマですね。なるべく素直に、人を驚かそうとするのではなく、自分がどういふふうに住きたいんだという方向に建築をつくりたいと思います。(談)



小屋裏階



2階



1階平面 縮尺1/150



東側外観 右下に排水管を利用した郵便受けが見える